子どもと大人の梅雨どき

塚田幸子

梅雨……このうっとうしい季節……とおとなである私には思われます。いつの頃から梅雨は私にとっていやな季節になったのでしょう。子どもの頃に溯って考えてみると、いやなことばかりではなかったという気がしてくるのです。長靴をはき、傘をさして歩いた泥んこだらけになる道も、その時の水溜りのひとつひとつに足を踏み入れたことも、大きなミミズを次々に見つけてはキャーキャー言ったことも、皆、とても楽しかったことなのです。幼稚園や学校で室内に閉じ込められて過ごしても、帰りには、雨なら雨で、もっとジグザグに寄り道をしながら、雨が上がっていれば、傘を振り回し、杖について、遊びながら帰ったものです。そうやって傘を壊し、母に叱られたことも確かにあったのですが、とにかく雨の日は雨の日で楽しかったことが沢山あるのです。梅雨の季節が私にとってうっとうしい季節と感じられるようになったのは、こうして徒歩で通った幼稚園、小学校、中学校の頃ではなく、少なくとも都電や国電等の交通機関に頼って、離れた高校や大学へ通うようになってからのことと思われます。

今では小学二年と二歳半の二人の娘の母となって梅雨の季節を迎えると、梅雨はなお一層いやな季節と感じてしまいます。子どもたちは雨の中を私の子どもの頃と同じように喜んで外へ出て行き、雨も泥をも友として存分に楽しんでくることができるのですが、母親としては濡れたり、泥はねのついた服や靴を想像しただけで嘆息を洩らさずにはいられなくなるのです。まあ、それでも、おとなとしての自分がいつもそんな風な世話役や監理者としてだけの立場で考えたり行動したりしているのではないことに気付かされ、嬉しくなることもあるわけで、公園の片隅に、半分干あがりかけた水溜りを見出した時など、それを小二の娘は「チョコレート」と呼んでいたことを想い浮かべ、その滑らかで温かそうな表面を見ていると、おとなであってもちょっとさわってみたい気がしてくるのです。その時です。「ああ、この気持ちなのだった」と思い、洗たくやそうじが後にたまって

も「ここでやらなければ。やらずにはいられないのだ」ということが、急にはっきりしてくるのです。子どものしあわせな気分をおとなである私にも十分に分けてもらえたということで、さっきまであんなにいやに思われていたことが、サーッと吹き消されていきます。

四月には入園、入学あるいは進級ということでスタートした子どもとおとなたち、新緑の中、運動会、遠足等と行事の続いたあと、六月は取りたてて出来事のないままに祝祭日という名の休暇もなく、夏休みまでちょっと長いなあと感じるのは、恐らく私ばかりではないことでしょう。では、子どもたちはどうなのでしょう、自分の子どもの頃はどうだったのでしょう、雨のうたをうたいながら、折り紙をしたなどと言うと、ワンパターンで、つくりごとのように自分でも思われるのですが、それは母の穏やかなやさしさを伴なって私にはなぜか忘れることができない情景です。あるいは又、ざわついた園舎の中、教室の中で、自分でもどうして今日はこんな騒々しいのだろうと思っているところへ、先生のこわい顔とどなり声……あと味は確かに悪かったものの、うっとうしさを先取りしていることは決してなかったのです。

汚されるのがいやで子どもを叱る母親、うるさく騒がれるのがいやで子どもを叱る教師、そのこと自体を反省はしても、おとなとしてどうやってその時を過ごしていくかということになると、今ひとつ、工夫とでもいうものが必要なのかもしれません。

その工夫というのは、おとながいろいろに考えて創造性を発揮する所なのだと言うことはたやすいのですが、おとなとしての物の見方や考え方というのは、経験に否定的に左右されていて、創造的というよりもむしろ逆に固定的に働きがちです。私自身、気付かされることは、子どもから教えられることが多いということなのです。水溜りの干あがった所をチョコレートと見ることは、子どもの口からでなければ決して生じなかったことでしょう。

洗たくも雑巾がけもいっそのこと子どもと一緒にやれたら楽しくなるかもしれません。はじめから上手にできないことはわかっていますから、子どものやりやすいようにとそこをさえ工夫していけばいいのではないでしょうか。そして子どもに任せっきりにしないで、子どもがどんな風に楽しみを発見していくのか学ぶつもりで、共に手足を、身体を動かしながら、この季節を過ごし、楽しい夏休みへとつなげていけたらとそんな風に思うのです。